東日本大震災被災地応援実行委員会たより

輪わだち

2012，5．11　NO32

何かしたい…この気持ちを大切に…

あの日から数えて、４２７日。今なお３０２１人の方々の行方が分からないという。故郷を離れて暮らす人々が３４万４４７７人。家族と離れて暮らす人々。仕事を捨てて転居・避難する人々。それぞれに抱える思いは重すぎる。震災後の生き方のキーワードのように「絆」という言葉が胸に届く。しかし「絆が切れている」と思う被災者が少なくないと聞く。もう一度、深く考えながら、向き合い、つながる行動を拡げていきたい…と私たちは願っている。

先月、取り組まれた震災を考える「世界一大きな授業」の感想文に最も数多く書かれた言葉が「何かしたいと思った」だった。この気持ちを届ける活動が、「絆が切れた」と思う被災者への心に届く応援ではないだろうか。

みなさんの気持ち届けました

メッセージ付き文房具セット２７２セットの他、鉛筆１１０本、大判ノートや消しゴム筆箱・ペンを、宮城県気仙沼市立条南中学校へお届けしました。
ご協力ありがとうございました。

保護者の皆様へ　……　被災地応援バザーにご協力ありがとうございました。当日の収益金は１４，５００円でした。

リレートーク

第２回目は、校長先生です。
前半・後半の２回連載です。

東北大震災・津波被害の轍を訪ねて

連休を利用して、１年２ヶ月後の東北大震災・津波の轍を訪ねた。東京から友人の車で仙台に入る。仙台に１泊後、東北自動車道、仙台南部道路、仙台東部道路を経由して最初の訪問地である岩沼市の仙台空港を尋ねた。昨年３月１１日の震災当時、津波で空港施設の１階部分は完全に水没し、多くの軽飛行機や車が流され、屋上デッキで空港関係者や乗客が助けを求めている様子がテレビのニュースで放映されたのが昨日のことのように思い出された。仙台東部道路の太平洋に面する海岸部では家屋は殆ど壊滅状態で家らしいものは見られないが、道路を挟んで、山側では浸水の影響もほとんどなく家屋は元のままの状態であつた。このことは、津波の波高が低く、高速道路が津波の防波堤の役割を果たしていたことを物語っている。今、空港はほぼ完全に修復され、連休中のこともあり、多くの乗降客で賑わっている様子からは、津波による被害などなかつたかのようであつたが、一旦、空港のデッキに立ち、周りを見渡すと、コンクリートで出来た建物と工業団地の工場以外、家屋らしい建物はほとんど見られなかつた。その後、大きな被害があつた若林地区の中心地を縦断している修復中の１０号線を北上した。この地は、多くの住宅が被害に遭い、多くの住民が被災した地区でもある。１階部分は津波に遭つたらしく、ほとんどが浸水して家屋が使えない状態で放置されていた。また、地面が陥没しているのか、道路の両側には水田のように水溜りがいたるところで観察された。また、連休を利用して、多くのボランテイアが活動していた。

その後、仙台東部道路から三陸自動車道に入り、松島・石巻を横断する４５号線を経由して、目的地の南三陸ホテルに宿泊した。このホテルは、南三陸町の手前の断崖の上にあり、ホテルの真下は太平洋の海である。当時の津波の様子をホテルの従業員に尋ねたところ、２階まで津波により浸水したが、鉄骨コンクリート建の頑丈なホテルそのものは地震による被害を免れたとのことである。このホテルからは被災地見学ツアーバスが運行されていた。

翌日、南三陸町に入る途中、最初に目に飛び込んできたのが、JR気仙沼線の鉄道のコンクリート製の橋脚で、両側の線路は完全に流され、橋脚のみが残骸として残る無残な姿をさらしていた。また、陥没した地面にコンクリート製の巨大は建物が大きく傾き横倒し状態のまま放置されている姿や布や木材が絡みついた、かつての建屋の鉄骨のみの姿、建物の屋上には車が乗り上げた風景から、今回の地震による津波の巨大さが想像された。南三陸町に入ると、町は廃墟と化し、津波で大破した自動車がうずたかく積み上げられていた。最後まで防災無線で住民に避難を呼びかけ自ら被災した女子職員が勤務した３階建ての防災建屋も鉄骨を残すのみで、鉄骨に巻きついた布が風になびいている様子は、見る者に何ともいえない自然災害の無常さと焦燥感をもたらした。

さらに４５号線を北上して、フカヒレの生産日本一で有名な水産業の町、気仙沼市に入る。この地区は、大川と鹿折川を津波が遡上し、また重油タンクから漏れたオイルから火災が発生して津波と火災による複合被災で、多くの家屋が流されまた焼失して、甚大な被害が生じ、多くの人が亡くなった地区でも知られている。川の両側には高台があり、家屋の被害状況は、住宅のある土地の高さにより明確に区別される。すなわち津波の到達した地点までの土地には、一家の住宅もなく、高い土地にある住宅は殆ど無傷のままである。火災が発生した地域はほとんどの住宅は焼失し、跡形も見られない。住宅の被災状況を見ると、津波がどの地点まで到達したかが即座に判断できる。少し高台にあるＪＲ気仙沼線の鹿折唐桑（ししおりからくわ）駅の近くには気仙沼港から津波で流された大型漁船が無残にも船体を横たえて放置されていた。気仙沼港から遠く離れた場所にこれほどの巨大な船が運ばれてきたとは、とても想像できない。巨大津波の想像を絶する力とはどれほどのものなのか。漁港近ぐはコンクリート以外の建物はすべて全壊で欠片も見あたらない。水産加工工場が数多く操業していた場所は、冷凍庫などの頑丈な建物以外は外枠を残すのみで、ほぼ全滅した。震災から１年２ケ月が経過した現在、２，３の冷凍工場が操業にこぎつけている現状から、地元の復興にかける意気込みと心意気を感じ、一日も早い水産業の振興を願うばかりある。空き地の仮設店舗には、時期が端午の節句でもあり、こいのぼりが泳ぎ、食堂やコンビニが営業していたが、訪れた人はまばらであまり活気は見られない。また、支援室には当時の写真やおみやげグッズも販売されていた。当時の現地の写真を見て、改めて当時の津波の恐ろしさをかみ締め、強い恐怖に襲われ立ちすくんでしまつた。